

「為」字の訓読について

——「ス」から「ナス」へ——

石川 洋子

一 はじめに

「為」字の字訓については、拙稿（『四書』の「一齋点」について⁽¹⁾）において少しく触れたが、この論文では、新たに「為」字の字訓について考察し、その字訓の中で「ス」と「ナス」を取り挙げ、その両者の関係について考察するものである。

二 「為」字の字訓について

「為」字の字訓についての研究には、田島毓堂氏のご論文『法華経為為章考』⁽²⁾、『為字のよみ——法華経訓読に
「為」字の訓読について

「為」字の訓読について

二

おける為字和訓を中心に――⁽³⁾等がある。前者を参照すると、⁽⁴⁾「為為章」とは、

唐代の碩学慈恩大師窥基（貞観六632～永淳元682）の撰にかかると、法華經二十八品中の為字を掲出してそれぞれ「訓」を与へ、各品毎にそれを集計して平去両声をそれぞれ何字とするもので、法華經中の為字の意味を一一記すものである。

とある。ここにある「訓」とは、漢字注のことである。また、後者を参照すると、⁽⁵⁾

為為章は為字を平去両声に分けて、

平声―由求当得定被作是名（九訓）

去声―以与助（三訓）

とする。補注では、平声九訓のほか「成」が加はり、去声に「何」が加はつてゐる。

とあり、この為為章訓等から導かれた法華經訓読の「法華經和訓」を同じく後者から引用する。⁽⁶⁾

平声為字、去声為字をそれぞれ訓別にまとめると次の通りである（法華經以外の訓も若干含む）

（平声訓）

由訓為字 ヨル

求訓為字 モトム

当訓為字 マサニ・ベシ・ス

得訓為字 ウ・タリ・ナル

被訓為字 カウブル・カブル・ル(ラル)・タメニ(ラ)ル・ナル

定訓為字 サダメテ・ス・ナス

作訓為字 ス・ナス・タリ・ツクル

是訓為字 コレ・ス・ナス・タリ・ナル

名訓為字 ナヅク・ス・ナス・ナル・タリ

以訓為字 (ガ)(ノ) タメ(ニ・ノ・ナリ)・ヲモテ(ノ・ナリ)

与訓為字 (ガ)(ノ) タメ(ニ・ノ)

助訓為字 タスク・タメニス

向訓為字 ムカフ・(ノ) タメニ・タメニス

平声訓では、由・求は例が少ないので除外すれば、得・被以外すべてス・ナスでよみうる。得・被の場合にそれを押し通せば、ナル・タリと交替することになるが、それぞれに適した和訓を与へようとすれば、右の如くなるのである。なほ成訓はすべて作訓字に付されてをり、特に記すことはない。去声訓はタメニ又はタメニスですべてがよまれるもので、平声訓に比べれば、単純である。

右の田島氏のご研究により、『法華経』の訓読における「為」字は、平声・去声に分かれて訓じられてをり、その字訓は多種あることが理解できるとともに、平声訓では「得・被以外すべてス・ナスでよみうる」といふことも理解できる。

二一 古点本における「為」字の訓読

ところで、古点本においては、「為」字を動詞に訓む場合、多く「ス」と訓じてゐたことは、次のことから明らかである。

『西大寺本金光明最勝王経の国語学的研究』⁽⁷⁾では、「ス(サ行變格動詞)」の項目で、次の如くある。

先ず漢字でスと訓ずるのは爲字であつて、

是等の如キ天を而も上首と爲り。^{一六}_{一三}

是の人の所獲の功德をば、寧口多しとヤ爲る、(あら)ず「不」とヤする。^{五二}_{一六}

などは言ふまでもない。

また、『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究 研究篇』⁽⁹⁾の「ス(爲)」の項目にも、次の如くある。

サ變動詞「ス」は、古點本では極めて頻繁に、又幅廣く用ゐられた語である。

◎慧、牙殖^{ケレシヨク}ヲ抽ツ、法ヲ其ノ資ト爲^ス(慧牙抽殖法爲其資) (七ノ二二九)

◎一ノ封書每ニ大綾一疋ヲ附(シ)テ信ト爲^ス(每一封書附大綾一疋爲信) (一ノ三四四)

右は最も基本的な「ス」の用法である。本點では「爲」字は動詞の場合多く「ス」(他に「ツクル」「サダム」などもあるが)と訓じ、「イフ」「オモフ」と訓じた例が見えない。

では次に、『改訂版古點本の國語學的研究 譯文篇』⁽¹⁰⁾の「語彙索引」を参考に見ると、「為」字は、サ變動詞「ス」

と訓ぜられることが多く、四段動詞の「ナス」と訓ぜられるのはその約十七分の一でしかない。

もう少し具体的に見てみると、大治二年（一一一七）に書写された『史記 孝景本紀第十二』⁽¹¹⁾には、五十三例の「為」字がある。そのうち、五十二例を「ス」と訓じてゐる。次の通りである。

皇子端ヲ立（テ）て、膠西一王と爲。^ナ（25〜26行目。ヲコト点は平仮名、仮名点は片仮名で示す）

皇一子徹モ立（テ）て、膠東王と爲。^ス（29行目）

残りの一例を「ナス」と訓じてゐる。次の通りである。

梁ヲ分（チ）て、五ニ爲シテ、四侯を封ス。^ナ（71行目）

二一三 現代の漢和辞典

ところが、現在市販されてゐる、大中小のそれぞれの漢和辞典を見ると、「為」字の字訓は「ナス」が中心であり、「スル（ス）」は第二義以下に扱はれてゐる。次の通りである。

『大漢和辞典』（諸橋徹次著 大修館書店⁽¹²⁾）は、「為」字の項に、

㊦なす。㊧つくる。こしらへる。㊨行ふ。㊩ほどこす。㊪みなす。㊫なる。㊬出来上る。成就する。㊭此

の状から彼の状に移り變る。㊮をさめる。㊯すべ安んじる。……（以下略。また、引用文中の用例略）

とあり、「する」といふ語を使用してゐない。

次に、『漢和中辞典』（赤塚忠 阿部吉雄編 旺文社⁽¹³⁾）であるが、「為」字の項に

「為」字の訓読について

曰①つくる(作)……②をさーめる(をさーむ)(治)……③なる(成)。成熟する。……④なーす(作)。する(す)……(後略)

とあり、「なす」は「する」よりも前に記されてゐる。又、同項の「語法」のところには「①なーす。」としか訓じ方が示されてゐない。

次に、『チャレンジ漢和辞典』(新田大作 福井文雅編 福武書店¹⁴)では、

①なす。する。……(後略)

とあり、「なす」はゴチック体で太く書かれている。

ここにおいて、古点本において「為」字はサ変動詞「ス」と訓ぜられてゐるのが一般であったことに対して、現代の漢和辞典ではサ行四段動詞「ナス」と読まれ、「ス」と「ナス」の勢力が逆転してゐることがわかる。

三 「ス」から「ナス」へ

三―一 『論語』の中の「為」字の字訓について

それでは、「為」字の動詞の字訓が、「ス」から「ナス」へ変化したのは何故であらうか。その理由は、近世末期の漢文訓読法の代表である一齋点の「為」字の訓読と深い関りがあるのではないかと思ふのである。

そこで、ここでは、一齋点と一齋点以前の訓法の資料の中で、『論語』の中に使用されてゐる「為」字の訓法

について調査検討する。

『論語』の中に使用されてゐる「為」字は『論語引得』⁽¹⁵⁾によると、一七二例である。

資料であるが、一齋点の他に、一齋点以前の訓法の資料として、中世のもの二種、近世の初期・中期・後期を代表するものをそれぞれ一種づつ三種選び、全部で六種のを調査した。次の通りである。

①大東急記念文庫蔵『論語集解』（複製本）建武四（一三三七）年 清原頼元点（巻一―六）、康永元（一三四一―二）年 清原良兼点（巻七―十）。

②『かながきろんご』巻四、七、八（安田文庫叢刊第一篇）室町時代中期成立。

③『四書集註』慶安三（一六五〇）年刊 林羅山（道春）河崎文庫・石川県立図書館蔵。

④『論語古訓正文』宝暦四（一七五四）年刊 太宰春台 青淵文庫・東京都立中央図書館蔵。

⑤『嘉永
新刻論語後藤点
片假名附完』嘉永元（一八四八）年刊 後藤芝山 架蔵。

⑥『四書集註』安政二（一八五五）年刊 佐藤一齋 東京大学総合図書館蔵。

一齋点には、文政八（一八二五）年刊行のものがあるが、安政二年刊行の方が補読語が多いので、今回はこちらを使用した。文政八年刊の方も参照した。

右の資料を、以下、①「建武本」、②「安田本」、③「道春点」、④「春台点」、⑤「後藤点」、⑥「一齋点」と呼ぶことにする。

三―二 一 齋点の「為」の字訓

先づ、一齋点の一七二例の「為」字の字訓を調査検討してみると、「ス」と「ナス」以外の字訓には次のやうなものがある。それぞれの字訓の下の数字は用例数である。

タメニ(タメ) 九例

タメニス 五例

タリ 三例

ツクル 八例

ナル 十八例

右の他に、字音で訓むと考へられる篇名の「為政第二」の「為」の字と、一齋点の本文に「為」字がない例がそれぞれ一例ずつあるので、合計四十五例となる。

右の「タメニス」は厳密に言へば「ス」の複合語であるが、ここでは「ス」として扱はないことにする。

右の字訓のそれぞれの用例を一例ずつ挙げると、次の通りである。

「タメニ」

爲_レメニ人ノ謀而不_レ忠_{ナラ}乎、(学而第一・四)

「タメニス」

古之學者爲_レ己_ニ (憲問第一四・二五)

「タリ」

君取_レト_ル於_レ呉爲_ニ同姓_一、(述而第七・三〇)

「ツクル」

譬_フ如_レ爲_ル山_ヲ、(子罕第九・一九)

「ナル」

子游爲_ル武城宰_ト、(雍也第六・一四)

さて、次に、「為」字一二七例のうち、右の四十五例を除いた一二七例について考察する。この一二七例は「ス」あるいは「ナス」と訓じてゐるのであるが、一見すると、「ス」と訓じてゐるのか、「ナス」と訓じてゐるのか次のやうにわからない例である。

克_レ己_ニ復_レ禮_ニ爲_レ仁_ヲ。(顔淵第一二・一)

爲_ニ孔丘_ト(微子第一八・六)

つまり、右の「為」字の補読語「ス」がサ変動詞「ス」の終止形「ス」なのか、サ行四段動詞「ナス」の終止形活用語尾の「ス」なのかかわからないのである。あるいは「ス」と「ナス」の両者が混用された結果の補読語とも考へられるのである。

そこで、一二七例の「為」字の補読語を整理すると、その内訳は次の通りである。

「為」字の訓読について

「為」字の訓読について

一〇

サ 一七例

シ 一二例

ス 八五例

セ 五例

補読語なし 八例

(合計 一二七例)

では、次に、それぞれの補読語について、「ス」の補読語であるのか、「ナス」の補読語であるのかを検討する。右のうち、補読語「サ」は、サ変動詞「ス」の活用形には表はれないので、サ行四段動詞「ナス」の未然形「ナサ」の活用語尾「サ」であることは明らかである。次は、補読語「サ」の用例十七例のうちの二例である。

子奚^ニ不^レ爲^レ爲^サ政^ヲ、(為政第二・二二)

君子三年不^レ爲^サ禮^ヲ、(陽貨第一七・二二)

補読語「シ」は、サ変「ス」の連用形「シ」であるのか、サ行四段「ナス」の連用形「ナシ」の活用語尾「シ」であるのかは、「シ」といふ補読語を見ただけでは、どちらか判断できない。次は、補読語「シ」の用例十二例のうちの二例である。

斯^レ爲^シ美^ト、(学而第一・一一)

爲^シ禮^ヲ不^レ敬^セ、(八佾第三・二六)

補読語「ス」も、補読語「シ」と同様に、サ変「ス」の終止形「ス」であるのか、四段「ナス」の終止形・連体形「ナス」の活用語尾「ス」であるのか、「ス」といふ補読語を見ただけではわからない。用例は、先述した二例である。

ただし、補読語「ス」を子細にこれを見れば、「スト」「スニ」「スノ」「スヤ」「スヲ」「ス十者⁽¹⁰⁾」「ス十若⁽¹¹⁾」という形を持つものがある。補読語「ス」の用例八十五例の内訳を見てみると、次の通りである。

スト 三例

スニ 四例

スノ 一例

スヤ 一例

スヲ 七例

ス十者 六例

ス十若 一例

「ス」とのみあるもの 六十二例

右のうち、助詞「ニ・ノ・ヤ・ヲ」また体言「者」、助動詞「若」を伴ってゐる補読語「ス」は「ナス」の連体形「ナス」の語尾「ス」であると推測される。また、「ス」とのみある用例でも、次のように疑問詞の結びとなる場合や、「為」字が体言に続く場合も、「ナス」の連体形語尾「ス」と考へられる。

「為」字の訓読について

一一一

夫子何^ニヲ爲^ス、(憲問第一四・二二)

子爲^レ誰^ト、(微子第一八・六)

親^ラ於^テ其身^ニ爲^ス不善^一者、(陽貨第一七・七)

ここにおいて言へることは、連体形と推測できる用例の補読語はすべて「ナス」の連体形の語尾「ス」であり、サ変の連体形「スル」といふ形が一例も見られないことである。

次に、補読語「セ」であるが、「シ」「ス」と同様に、サ変動詞「ス」の未然形「セ」と、サ行四段動詞「ナス」の已然形・命令形の活用語尾「セ」と同じ形である。しかし、用例の文意から、五例のうち三例は、「ナス」の命令形「ナセ」の補読語「セ」であることがわかる。その一例を次に示す。

女^チ安^クハ則^レ爲^レ之^ヲ。(陽貨第一七・二二)

因^ニこの原文を、道春点は「爲^{セヨ}」、春台点は「爲^ヨ」、後藤点は「爲^ト」と、サ変「ス」の命令形「セヨ」と訓じてゐる。

残り二例のうち一例の用例は次の通りである。

女^チ爲^セ周南召南^ヲ矣^ヤ乎。(陽貨第一七・一〇)

この用例だけでは、補読語「セ」の活用形は何であるかわからないが、この原文の直後に、

人^ニ不^レ爲^サ周召南^ヲ。(陽貨第一七・一〇)

とあり、「為」字を「ナス」の未然形「ナサ」と訓じてゐるので、先の用例は、「ナス」の已然形「ナセ」の活用

語尾「セ」であると思はれる。因みに、この原文の「為」字は、建武本、道春点、後藤点は「マナブ」と訓じてゐるところである。

残りの一例であるが、次の通りである。

孟公綽^{爲セバ}趙魏ノ老ト則優。(憲問第一四・二二)

この用例の補読語「セ」は、サ変「ス」の未然形の「セ」であるのか、サ行四段「ナス」の已然形「ナセ」の活用語尾「セ」であるのか迷ふところである。

ところで、一齋点において、「則」字が原文にある条件表現は、「レバ則」と訓ぜられることは、鈴木直治氏⁽¹⁷⁾や斎藤文俊氏の指摘⁽¹⁸⁾されてゐるところである。「レバ」は已然形（仮定形）「ナバ」であると考へられる。そこで、この「セバ」の「セ」は、「ナス」の已然形活用語尾と考へられる。

以上、補読語「サ」「シ」「ス」「セ」について検討してきた。「サ」は「ナス」の未然形「ナサ」の活用語尾であり、「セ」も「ナス」の已然形、命令形の活用語尾である。「ス」の一部は「ナス」の連体形活用語尾と考へられる。また、これらの補読語には、サ変の未然形「セ」、連体形「スル」、已然形「スレ」、命令形「セヨ」といふ形が一例も見られない。このことから、「シ」と、「ス」の不明なものについても、「ナス」の活用語尾と推測できる。したがって、一齋点は「為」字を「ナス」と訓じて、「ス」とは訓じてゐないのではないかと思ふ。

鈴木直治氏の『中国語と漢文⁽¹⁹⁾』に、「一齋点は簡潔に読み、しかも、原文の文字を記憶できるように読むよう努めている」とあり、「為」字を「ナス」と一字一訓化して訓じることにより、「為」字が原文中に使用されてゐ

ることを記憶したのではないかと思ふ。

次に、活用語尾の補読語がない用例は八例があるが、このうち一例を挙げると、次の通りである。

天將_下以_二夫子_一ヲ爲_中木鐸_上。(八佾第三・二四)

右の用例と同様に、他の七例も「為_シ」と「為」の字訓が推量の助動詞「ン(ム)」に続く形になってゐる。

これを「(セ)ン」と訓じてゐるのか、「(ナサ)ン」と訓じてゐるのかは不明である。

そこで、「ナス」の未然形「サ」が補読されてゐる用例十七例をもう一度詳しく見てみると、

不_レ為_サ 十例

為_サン 五例

為_サハ 一例

為_サ(シ)ム 一例

の如くであつた。右の通り、「ナス」の未然形に訓じる場合、活用語尾「サ」を補読してサ変と区別してゐるといふ事実から考へると、「サ」といふ活用語尾の補読語のない「為_シ」は、「(セ)ン」とサ変の動詞に訓じてゐるとも考へられるが、疑問である。

以上、一齋点においては、右の八例を除いて、一一九例は「ナス」と訓じてゐるといへる。

三一三 一齋点以前の資料における「為」字の字訓

一齋点以前の資料①から⑤の「為」字の字訓一七二例を調査した結果、一齋点よりも多種の字訓があり、かつ、『論語』の同じ原文でも、資料により訓じ方の相違することがあることがわかった。

各資料で使用される「為」字の字訓を五十音順に挙げると、次の通りである。

オコス・オコナフ・ス・タスク・タメニ・タメニス・タリ・ツクル・ナス・ナル・マナブ・ラル・ラサム

右の字訓で訓じられた用例数を、各資料ごとにまとめたものが次の表1である。

- 表1の中の空欄は「0」を示す。
- 字訓については、一齋点と比較するために、「ス」と「ナス」を先に示した。
- 字音の用例には、『論語』の篇名である「為政第二」に使用されてゐる「為」字を含む。
- 本文異同とは、『論語』の原文に「為」字がない場合を「1」とする。

• 不明とは、何と訓ぜられてゐるかわからないものである。

• 合計が一七二例より多いものは二訓表記のあるものであり、少ないものは本文が欠けてゐるものである。また、「ス」と「ナス」の活用形の内訳を示すものが、次の表2である。

では、先ず、表1、表2に基づいて、各資料ごとに「ス」と「ナス」の字訓について検討してゆく。

① 建武本

「為」字の訓読について

建武本は、ヲコト点と仮名点より訓点^が施されてゐるので、「ス」と訓ずるか、「ナス」と訓ずるかは、次の通り明らかである。

礼ノ〔之〕用ハ和ヲ貴シト為^ス（礼之用和為貴）（学而第一・一一二）
 素キコレヲ以テ絢^ハ（を）為^ストハ^ハ（素以為絢兮）（為政第三・八）

表1

資料 の「為」字 の字訓	⑥ 一斎点	⑤ 後藤点	④ 春台点	③ 道春点	② 安田本	① 建武本
ス	8?	92	33	107	50	109
ナ ス	119	15		8	1	5
オ コ ス					1	1
オ コ ナ フ				1		
タ ス ク			1	2	2	2
タメニ(タメ)	9	9	9	9	6	10
タメニス	5	5	3	3	3	3
タ リ	3	20	9	23	13	24
ツ ク ル	8	9	8	9	5	8
ナ ル	18	10	21	4	1	2
マ ナ ブ		2	2	3	1	4
ラ ル			1			
ヲ サ ム		7		7	5	7
不 明			83			
字 音	1	2	2	2	1	2
本 文 異 同	1	1		1	1	
合 計	172	172	172	179	90	177

従つて、一七二例の

「為」字のうち、「ス」

と「ナス」と訓ずる用例

数は、表1の通り、「ス」

一〇九例、「ナス」五例

である。

建武本は室町期の写本

であるが、多くの「為」

字は「ス」と訓ぜられて

ゐる。

②安田本

安田本は、巻四、七、

表 2

補統語		資料					
		⑥一齋点	⑤後藤点	④春台点	③道春点	②安田本	①建武本
(ス)	セ	8?	20	1	24	14	27
	シ		8	6	9	2	5
	ス		28	3	35	18	39
	スル		31	20	32	13	29
	スレ		2	1	2	3	3
	セヨ		3	2	5		6
「ス」合計		8?	92	33	106	50	109
(ナス)	サ	17	2				
	シ	12	5		2	1	1
	ス	85	8		6		4
	セ	5					
「ナス」合計		119	15		8	1	5

ここでも、やはり、「為」字は多く「ス」と訓ぜられてゐる。

③道春点

道春点の一七二例の「為」字に対する付訓の方法をみると、篇名の「為政第二」の「為」字以外は、その訓じ方が補読語として付訓されてゐる。「ス」と「ナス」の付訓の方法は次の通りである。

八のみしか存してゐない室町時代の写本であるが、全文平仮名で書かれてゐるので、訓じ方は明らかである。次の通りである。

な|けれともありとす。むなし|けれとも
み|てりとす。(亡而爲有、虚而爲盈)(述
而第七・二五)〈傍線、石川〉

こ|うせいかならずし|そののうれへをな
し|てん。(後世必爲子孫憂)(季氏第一

六・一)〈傍線、石川〉

安田本では、「為」字は九十例あるが、「ス」と「ナス」と訓ずる用例数は、表1の通り、「ス」五十例、「ナス」一例である。

「ス」の場合

子^{ナシ}奚^{ナシ}不^レ爲^レ政^ヲ、(為政第二・二二)

亡^{ナケレ}而^レ爲^レ有^リト、(述而第七・二五)

吾^レ以^レテ^{ナシ}子^{ナシ}爲^レ異^{ナル}之^間ト、(先進第一・二四)

爲^スレ仁^ヲ由^レ己^レニ、(顔淵第一・二)

何^{ナシ}爲^ス其^レ然^也、(雍也第六・二六)

女^チ安^クハ^チ則^セ爲^レ之^ヲ、(陽貨第一七・二二)

「ナス」の場合

後世^{ナシ}必^ス爲^スレ子孫ノ憂^ヘヲ、(季氏第一六・一)

素^{ソノ}以^テ爲^スレ絢^兮、(八佾第三・八)

右の如くなので、道春点も、建武本、安田本と同様に、「ス」と訓じてゐるか、「ナス」と訓じてゐるかは付訓を見ることで明らかである。その用例数は表1の通り、「ス」一〇七例、「ナス」八例である。この「ス」と「ナス」の割合は、建武本と変らない。

④春台点

春台点は、これまでの資料①から③までと違って、「為」字に対する付訓が少ないので、何と訓じてゐるか不明な用例が、一七二例の中で八十三例もある。よって、「ス」と「ナス」に関しても判断できない場合が多いが、

補読語をみると、表2の通り、四段「ナス」の未然形語尾「サ」、已然形・命令形語尾「セ」は表はれない。補読語として現はれるのはサ変「ス」の活用形である。次の通りである。

雖^レ多^{シト} 亦^ラ奚^ヲ 以^テ爲^{セン}、(子路第一三・五)

亡^ニ而^シ爲^シ有^ト、(述而第七・二五)

約^ニ而^シ爲^ス泰^ト、(述而第七・二五)

何^レ爲^レ其^レ然^也、(雍也第六・二六)

女^安クハ、則^レ爲^ヨ之^ヲ、(陽貨第一七・二二)

右の補読語から考へると、春台点も、やはり、「ナス」ではなく、「ス」と訓じてみたであらうと考へられる。

このことを、さらに、太宰春台の著書『倭読要領』⁽²⁰⁾で補足すると、不明とした中の一例に、次の用例がある。

吾^以テ子^ヲ爲^ニ異^ヲ之^間ト、(先進第一一・二四)

この用例を、『倭読要領』では、「吾^ヲ子^ヲ以^テ異^ヲ問^トス」と訓じ、「為」字はサ変「ス」の終止形に訓じてゐるのである。このことは、春台は「為」字をサ変「ス」と訓じてゐる傍証になると思ふ。

⑤ 後藤点

後藤点の初刻本は寛政六(一七九四)年であるが、ここでは、片仮名総ルビ付の後藤点を便宜上使用した。「ス」と「ナス」の用例を一例ずつ挙げると、次の通りである。

仁^シ以^テ爲^ニ己^ト任^ト、(泰伯第八・七)

「為」字の訓読について

亦^{アタ}可^コ三^{モツテ}以^イ爲^ニ成人^{オイシント}一^{ヒト}矣、(憲問第一四・一四)

「ス」と「ナス」の用例数は表2の通り、「ス」九十二例、「ナス」一五例である。「ナス」と訓じる割合が多くなつてはゐるけれども、「爲」字の多くは「ス」と訓じられてゐる。

四 終わりに

以上、考察の結果は次の通りである。

- a、一齋点は「為」字をほとんど「ナス」と訓ずる。
- b、一齋点以前の資料の建武本、安田本、道春点、春台点、後藤点は、「為」字をほとんど「ス」と訓ずる。
- c、一齋点は、「為」字の字訓の種類が少ない。それは、他の資料では「タスク」「マナブ」「ヲサム」等といふ字訓で訓じてゐるところや、また、字音で「無為」(ムイ)と訓じてゐるところを、一齋点はそれらを「ナス」と訓じてゐるためである。
- d、すべての資料で、「タメニ(タメ)」「タメニス」「ツクル」という字訓は共通してゐる。
- e、一齋点と春台点は他の資料で、「タリ」と訓ずるものを、「ナル」(費ノ宰^{ツラ}使^ム↓費ノ宰^ト為^ラ使^ム)と訓ずることが多い。

f、「為」字は、古点本において、「ス」と訓じられることがほとんどであったが、現代の漢和辞典では「ナス」

を第一義とするやうになった。それは、「為」字を統一的に「ナス」と訓ずるやうになった一齋点の影響を深く受けてゐるのではないかと思はれる。

以上、「為」字の訓読について、「ス」と「ナス」を中心に考察した。近世の漢文訓読の影響といふのは、案外身近なところに起つてゐるのだといふことを知ったが、もっと体系的に日本語に与へた近世の訓読の影響を考察することは、今後の課題になると思ふ。

注

- (1) 『日本語論究2』所収。平成四年十月。和泉書院。
- (2) 『佐藤茂教授論集国語学』所収。昭和五十五年。桜風社。
- (3) 『金田一春彦博士古稀記念論文集 第一卷 国語学編』所収。昭和五十八年。三省堂。
- (4) 注2論文の二八四頁。
- (5) 注3の論文の二七二頁。
- (6) 注3の論文の二八七頁～二八八頁。
- (7) 春日政治著。『春日政治著作集 別巻』昭和六十年六月 勉誠社。
- (8) 一三三頁。
- (9) 築島裕著。 四二二頁。
- (10) 中田祝夫著。
- (11) 築島裕 石川洋子共著。『別冊年報Ⅰ』一九九〇年二月、『別冊年報Ⅱ』一九九二年三月、実践女子大学文芸資料研究所。
- (12) 昭和三十三年四月、昭和四十二年五月、縮刷一刷を使用。
- (13) 昭和五十二年十月、昭和五十三年一月重版を使用。

- (14) 一九九一年十月、初版を使用。
- (15) 洪業、聶崇岐、李書春、趙豊田、馬錫用編集 一九八六年十一月、上海古籍出版社。
- (16) 『論語』の篇章は、金谷治訳注 岩波文庫本『論語』による。
- (17) 『中国語と漢文』（『中国語研究学習双書12』所収）昭和五十年五月 光生館。
- (18) 「近世における『論語』の訓読法の展開―条件表現による分類―」（『訓点語と訓点資料』第七十七輯所収）昭和六十二年三月。
- (19) 注17の一三四頁。
- (20) 小林芳規解説『勉誠社文庫66』昭和五十四年八月。

〔附記〕

この論文は、平成三年十月五日、同朋学会で行った研究発表をもとに、補訂を加へてまとめたものです。